

悩まなくてもだいじょうぶ



知っておきたい アレルギーの話

NPO法人アレルギーを考える母の会
代表 園部まり子



イラスト／清水直子

第5回

子どものための「医教連携」を

学校生活でも

多くの問題に直面

アレルギーの子どもたちは、医療だけでなく、学校生活でも多くの問題に直面します。喘息で埃が舞う掃除を免除される、食物アレルギーでみんなと同じ給食を食べられないことがある、アトピー性皮膚炎の肌が目立つなど、少しの違いが仲間外れやいじめ、果ては不登校の原因になってしまふことがあります。そんな相談を受けるたびに胸の張り裂ける思いがします。

文部科学省も手をこまねているわけではなく、すべての児童生徒が安心して学校生活を送ることのできる環境づくりをめざして、平成20年春から全国の小中高校に「学校のア

レルギー疾患に対する取り組みガイドライン」を配布し、教職員など学校全体の正しい理解に基づく取り組みを促しています。ただ、学校現場には「ガイドラインを渡されただけでは対応が難しい」という声があるのも事実です。

「母の会」は以前から、重いアレルギーの子が在籍する学校に専門医が出向いて教職員への研修を行ない、アレルギー児を学校全体で支える取り組みを促す橋渡しを続けてきました。「学校ガイドライン」が配布された平成20年には6校、21年は12校へ国立成育医療センターや国立病院機構相模原病院、神奈川県立子ども医療センターなどの専門医に出向いていただき、アレルギー疾患の正しい理解や支援の在り方を、講演や質



そのべ・まりこ●神奈川県福祉協議会セルフヘルプ支援事業運営委員。困っている患者と専門医との橋渡しを第一に「治療ガイドライン」情報などの提供、専門医による講演会や会報発行、行政への働きかけを行なっている。共著に『食物アレルギーの手びき 改訂第2版』（南江堂刊）。

疑を通して研修していただきました。

「命を預かる現場のために必要な研修」

研修終了後に各校で行なったアンケートには、「命を預かる現場の意識を高めるために必要な研修だと思った」「保護者との信頼関係を築くこと、一緒に考えていけることが大事だと感じた」などという声が寄せられ、後日には、「一人の子のために学校と専門医が直接連携して適切な医療に引き継ぐことができた」などのご報告もいただきました。

正しい理解を欠いて適切な支援はできません。研修を通じて、学校と専門医が直接、連絡を取り合える「医教連携」が必要であることを改めて感じました。